

変わりゆくもの、変わらないもの

原田幸子

奈良県立三室病院産婦人科婦長

関東通信病院の湯川さんより、「仕事に生きている人は頑張るしかないよ」の言葉とともにバトンを渡された原田です。湯川さんから、いつもユニークな発想と斬新な刺激を受けています。彼女と話していると、私も何かしなければという気持ちになってきます。

私は助産婦として、出身校の母体である聖バルナバ病院でその活動を開始し、数多くの分娩介助を経験し、心と技を学びました。その後、現在の職場である奈良県立三室病院開設時より産婦人科病棟で働いています。その間内科病棟に2年間勤務し、再び産婦人科病棟に戻って4年目を迎え、現在病棟婦長を務めています。

私自身、内科病棟を経験したことにより、看護や人間そのものに対しての見方、考え方が変わってきました。時代の流れや社会情勢の変化により、女性の生き方や考え方も変わってきているな、と最近の産婦人科病棟の中で実感したことを書いてみたいと思います。

気持ちは明るく

産婦人科病棟で再び働き出した私は、自分に発想の転換、意識改革をもたらしたともいうべき事例に出会いました。

その産婦さんは、第1子を他病院で心奇形、口唇蓋裂等の障害のため亡くされ、今回当院で第2子を出産されました。妊娠中、切迫早産で2～3週間入院しましたが、その後の経過は異常なく、満期産で出産されました。

児には口唇歯齦破裂がありましたが、全身状態は良好で元気な女児でした。

出生直後、ご主人や家族に主治医より説明があり、本人への説明をどうするかという話に、ご主人は、「本人もこのことを一番気にしていたのですぐに話して欲しい」と希望されました。そこで、その褥婦さんの歩行開始を待って、児の状態について説明をし、その後、児に面会して頂きました。「他は大丈夫ですか。心臓は何ともないんですか」と、褥婦さんは目にいっぱい涙を溜め、それでも笑顔を作ろうとして話されました。

入院中は、本人の希望により大部屋のまま、母児同室や沐浴等、他の褥婦さんと同じように過ごされました。

授乳時には、若いスタッフが口唇裂の部分に絆創膏を貼り、「こうするとうまく飲めるね、可愛い顔してる」などと話しながら楽しそうに指導している姿も度々見かけました。

今までに私たちが受けた教育では、出生児に何か異常があっても、褥婦の心身の回復、適応の時期を待って徐々に説明するのが原則でした。

しかし、個々の人間のニードは多様であり、かつそれぞれがそれなりの背景を持ち、また出産や育児に対しても多くの情報を持っておられます。さらに、今は医療チームと患者とその家族がより密接に話し合える場が持てるようになり、私は状況に応じてケース・バイ・ケースで判断し対応していくことの大切さ、素晴らしさを学びました。

その中で私たち助産婦は、その調整役として大きな役割を担わなければならないと考えています。お互いによく話し合い、その人にとって最も良い選択ができるよう援助するという役割を痛感しました。



女性が強くなった

出産の場面ばかりではありません。婦人科疾患で入院されている患者さんからは、手術を受けた後も、自分の身体がどうなっているのか、ホルモンの働きはどうかといった質問がよく聞かれます。

悪性疾患の場合、何らかの形で病名告知を受けておられる患者さんが多いため、疾患について、治療についてなど、その都度話し合いが持たれます。検査のデータと治療の関係も患者さんにとっては大きな関心事です。長期間に及ぶ化学療法、それにともなう副作用の数々……。患者さんの知りたいことはたくさんあります。

女性が強くなったと言われ続けてきましたが、私は現在に至って本当の意味で女性が自分自身のことを真剣に考え、自分自身の選択ができるようになったのだ、と思っています。そして、女性であるが故の婦人科疾患を持つ患者さんの中に、時には私自身の姿を見ながら日々の看護に携わっています。

また、ターミナルの患者さんに対しても、女性としてその人らしく生きるには、今この時このひと時をどのように過ごすことがその人にとって大切なのか、そのために私たちは何ができるのだろうかと考えながら援助していくことが肝要と考えています。

助産婦の心は

助産婦はもっと専門性を生かし、女性全般ではなく“お産”にこだわるべきだという論議がある

中、確かに開業助産婦諸姉の活躍を聞くと心が動かされます。しかし、地域の総合病院の中の産婦人科病棟に働く現実の私には、長期入院の患者さんやターミナルの患者さんへの看護のこだわり、すなわち、女性の生きざまにかかわっていききたいという思いも捨てきれません。

個々の患者さんのニーズに合った“患者中心の看護”をめざし、私なりのこだわりを持って、自分の役割を精一杯果たしていきたいと考えています。

そして一先輩助産婦としては、大きな希望を抱き、後から続いてくるフレッシュ助産婦たちに、分娩件数の減少している中、助産の技の部分を中心に指導し、磨いていったらよいのか、また学問の部分で伝えるにいくいといったものをどう伝えたらよいのか、という大変な課題があります。

私は、助産婦としていつも分娩にかかわっていききたいという思いも大切にしつつ、産婦人科病棟の婦長として、女性がよりよく生きていかれるように援助していくこの仕事を続けていきたい、と考えています。

* * *

次のりれー随筆は聖バルナバ助産婦学院の同級生で、現在石川県立総合看護専門学校母性実習担当教師として、後輩の育成に力を注いでおられる吉野幸枝さんをお願いします。

何事にもひたむきで誠実な彼女と話をしていると、私はいつも暖かな優しさを感じます。日々の忙しきで優しさを忘れそうになったら会いたくなる、そんな大切な友人です。家庭と仕事を通しての暖かな話を期待しています。